



「全国学力・学習状況調査」の結果より【「教科に関する調査」編】

文部科学省による「全国学力・学習状況調査」は、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てることなどをねらいとして小学校6年生、中学校3年生を対象として毎年行われています。今年度は、4月17日(木)に、「教科(国語・算数・理科)に関する調査」と「児童質問調査」を実施しました。



大阪市の小学校全体の傾向としては、市教育委員会の支援のもと各校での学力向上のこれまでの取り組みの成果が表れ、国語科・算数科とも平均正答率の全国平均との差が少しずつ縮まりつつあり、全国水準まであとひといきのところまで向上しています。

本校でも、毎年調査結果の分析を行い、成果や今後取り組むべき課題について明らかにしています。本校の今年度の結果概要は次のとおりです。

	国語		算数		理科	
	平均正答率 (%)	平均無解答率 (%)	平均正答率 (%)	平均無解答率 (%)	平均正答率 (%)	平均無解答率 (%)
本校	62	5.1	58	3.7	54	4.1
大阪市	65	2.8	58	3.3	55	3.0
全国	66.8	3.3	58.0	3.6	57.1	2.8

算数科・理科については、平均正答率がおおむね全国平均に並んでおり、子どもたちのがんばりが見られました。

国語					算数				
学習指導要領の内容	対象 設問数	平均正答率 (%)			学習指導要領の 領域	対象 設問数	平均正答率 (%)		
		本校	大阪市	全国			本校	大阪市	全国
(1)言葉の特徴や 使い方に関する事項	2	65.1	77.1	76.9	A 数と計算	8	61.9	62.7	62.3
(2)情報の扱い方 に関する事項	1	59.0	60.4	63.1	B 図形	4	56.0	56.4	56.2
(3)我が国の言語文化 に関する事項	1	69.9	79.9	81.2	C 測定	2	55.4	54.9	54.8
A 話すこと・ 聞くこと	3	62.7	64.0	66.3	C 変化と関係	3	62.7	58.2	57.5
B 書くこと	3	66.3	66.7	69.5	D データの活用	5	62.7	61.9	62.6
C 読むこと	4	56.9	56.9	57.5					

理科				
学習指導要領の 区分・領域	対象 設問数	平均正答率 (%)		
		本校	大阪市	全国
A区分 「エネルギー」 を柱とする領域	4	43.7	42.7	46.7
「粒子」を 柱とする領域	6	48.4	49.5	51.4
B区分 「生命」を 柱とする領域	4	50.6	51.4	52.0
「地球」を 柱とする領域	6	62.4	63.8	66.7

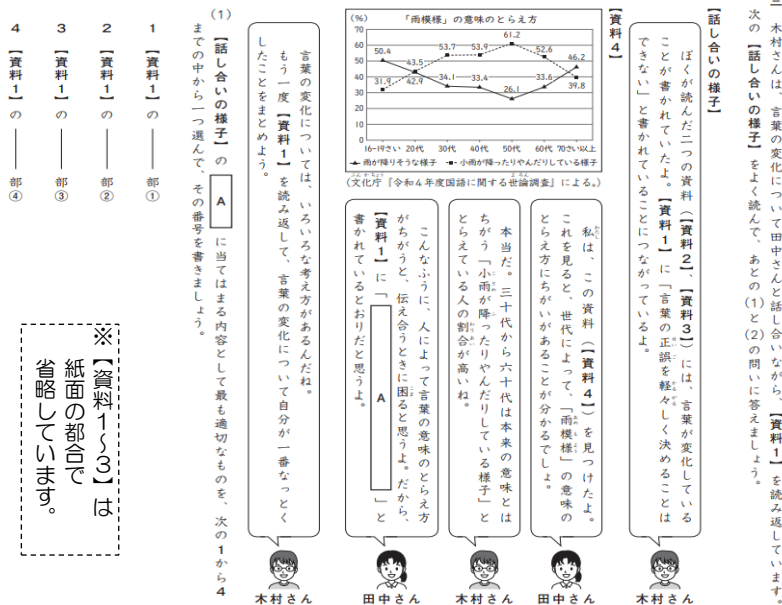
平均正答率を内容・領域ごとや、設問ごとに見てみると、国語科では「読むこと」領域で全国平均にせまっており、文章を読み取って、文章全体の構成をとらえたり、要旨を把握したりする設問でがんばりが見られました。一方で「言葉の特徴や使い方に関する事項」「我が国の言語文化に関する事項」は全国平均を下回っており、漢字や言葉等に関する知識や技能に課題が見られました。

(※裏面に続く)

(※表面より)

算数科では、特に「変化と関係」領域で全国平均を大きく上回っており、の2つの数量の関係について考える設問でがんばりが見られました。一方で、「データの活用」領域で、表やグラフを読み取って考察する設問に課題が見られました。

理科では、観察した結果から新たな問題を見いだしたり、自然事象について学習で得た知識をもとにその理由を考えたりする設問で成果が見られました。一方で、身の回りの金属に関する知識を問う設問で課題が見られました。



左は、国語科で子どもの正答率がとりわけ低かった問題です。目的に応じて文章と図表などを結び付けるなどして必要な情報を見付けることができるかを問うています。平均正答率は、本校で39.8%、全国で40.8%でした。このような「複数の資料を読み取って考える問題」は毎年出題されています。

下は、算数科で全国的に子どもの課題が見られた問題で、平均正答率は本校で22.9%、全国で23.0%でした。無解答率はすべての設問の中でもっとも大きく、本校で19.3%、全国で15.7%の子どもが解答を書いていませんでした。問題文から「みおりさん」や「ひろとさん」の考え方を、順を追

って読み取り、「3/4」と「2/3」が、共通する単位分数のいくつ分になるかを自分の言葉で説明するという、子どもたちの「論理的思考力」が問われる設問です。「長い問題文を読むこと」「自分の言葉で説明すること」は、子どもたちにとってハードルの高い作業なので、それが平均正答率や無解答率に表れています。しかしながら、このような設問は例年出題されます。つまり、国が、子どもの「論理的思考力」がどれだけ身に付いてきているのかに注目している、ということです。

全国学力・学習状況調査の設問の特徴に、「問題文が長い」ことがあります。そのため、問題場面を文章や表などの情報から順序よく丁寧に読み取り、解決方法を判断し、求められた答え方に沿って解答しなくてはなりません。途中で読むことをあきらめず、ねばり強く情報を読み取る力も要求されています。もう一つの特徴は、「言葉で説明する」問題であることです。自分がどのように考えたのか、筋道立てて相手に伝えるように説明する「表現力」が求められます。

この調査により測定できるのは、子どもの学力の一部分にすぎません。しかしながら、「このような問題ができる子どもを育ててほしい」という文部科学省からのメッセージが込められているのです。そして、「このような内容をこのような方法で教えてほしい」ということが書かれた学習指導要領と表裏一体を成すものです。単純な1問1答形式の問題がほとんど出題されないのは、今求められている学力が、情報を読み取り分析する総合的な「読解力」であり、生活の中で生きて働く「活用力」であるためです。

本校では、今後もさまざまな教科の学習を通して、将来の社会で必要な問題解決能力や判断力、創造力などを高めていきたいと考えています。

(2) ひろとさんたちは、分数のたし算についても、小数で考えたようにふり返っています。

まず、みおりさんは、 $\frac{2}{5} + \frac{1}{5}$ についてまとめています。



$\frac{2}{5}$ は $\frac{1}{5}$ の2個分、 $\frac{1}{5}$ は $\frac{1}{5}$ の1個分です。
 $\frac{2}{5} + \frac{1}{5}$ の計算は、 $\frac{1}{5}$ をもとにすると、 $2 + 1$ を使って考えることができます。

$\frac{2}{5} + \frac{1}{5}$ は、もとにする数を $\frac{1}{5}$ にすると、整数のたし算を使って計算することができます。

次に、ひろとさんは、 $\frac{3}{4} + \frac{2}{3}$ について考えています。



$\frac{3}{4}$ は $\frac{1}{4}$ の3個分、 $\frac{2}{3}$ は $\frac{1}{3}$ の2個分です。
もとにする数が $\frac{1}{4}$ と $\frac{1}{3}$ でちがうので、同じ数にしたいです。

$\frac{3}{4} + \frac{2}{3}$ についても、もとにする数を同じ数にして考えることができます。

もとにする数を同じ数にするとき、その数は何になりますか。その数を書きましょう。また、 $\frac{3}{4}$ はその数の何個分、 $\frac{2}{3}$ はその数の何個分ですか。数や言葉を使って書きましょう。